



さっぽろし
札幌市

日本の47都道府県の最北にある北海道は旅行や仕事の移動に飛行機が欠かせません。冬は雪のえいきょうを受けがちですが、空港にはできるだけ時間通りに、そして安全に飛行機を出発や到着させるために神経をとがらせながら働く人たちがいます。札幌のこども記者まなつくの2人が札幌丘珠空港（札幌市東区）取材しました。（中出幸恵）

冬の空港 天候とのたたかい

「まなつく」は、まなつんの「まな」と「行く・聞く・書く」に由来する愛称です

まなつく 見ぶん 録



飛行機について、雪や氷を取る作業について、担当者の熊谷仁志さん（右）に取材する笹子思会さん（左）と中野涼さん＝1月、札幌丘珠空港

1月上旬、朝8時半の丘珠空港の気温は氷点下2.5度。冷たい風がふく中、オホーツク地方・女満別空港行きのプロペラ機が、出発に向けて動き出しました。まなつくの笹子思会さん（発寒東小4年）と中野涼さん（北九条小6年）は、「飛行機をこんなに近くで見たのは初めて」とこころふん気味です。

冬の運航に欠かせないのが、飛行機に特殊な液体をかけて、機体の雪や氷を解かしたり、付かないようにする作業。これをやらないと、飛行機が飛ぶ力が低下して安全に飛行できず。

機体の雪氷解かす・各機に指示素早く

飛行機について、雪や氷を取る作業について、担当者の熊谷仁志さん（右）に取材する笹子思会さん（左）と中野涼さん＝1月、札幌丘珠空港

北海道エアシステム（HAC）は飛行機が出発する約20分前から、2人1組で作業に取りかかります。1人は液体が入ったタンクを積んだトラックを運転、もう1人は高さ約7メートルの作業用コンドミナリに乗り、約60度に温めた液を特殊なホースを使ってつばさにかけます。担当する熊谷仁志さん（58）は「時間との勝負。プロペラ機1機につき10～15分で終わらせます」中野さんが「大変なことは何ですか」と聞くと、熊谷さんは「雪が降る中、機体に液体をかけ続ける時です。厚着しないととても寒いです」と答えました。飛行機に離陸や着陸の指示を出すのは、管制官の仕事です。その多くは国家公務員と航空自衛隊員ですが、丘珠空港は陸上自衛隊員が管制官を務めるめずらしい空港です。

そこで、まなつくたちは陸上自衛隊丘珠駐屯地にある管制塔へ。最上階の管制室は窓に囲まれていて、ぐるっと遠くまで見渡せます。「いい景色」と笹子さん。その横で、管制官の岡本成海さん（28）は「ふぶくと何も見えなくなることもあります」と教えてくれました。

雪のえいきょうで、同じような時間帯に飛行機が着陸や離陸するなど、空港や上空が混雑することがあります。この時、管制官は飛行機同士がぶつからないように、飛ぶ高さや経路を変える指示を出します。岡本さんが特にきんちようする状況で、「飛行機のスピードは速いので短い時間で判断し、的確に伝えることが重要です」と言います。

このほか、2人は天気予報を見て飛行コースなどを決める部署や自衛隊員でつくる除雪隊も取材しました。笹子さんと中野さんは「多くの人が協力して、冬の安全な運航を支えていることが分かりました」と満足した表情で言いました。



管制官7年目の岡本成海さん（右）から仕事内容を聞くまなつくたち＝1月、陸上自衛隊丘珠駐屯地内の管制塔（いずれも小松巧さつえい）

まなつくに動画



難しいけどカッコいい

中野 涼さん

札幌市・北九条小6年



連携する大切さを実感

笹子 思会さん

札幌市・発寒東小4年

空の安全を守る管制官に取材ができて良かったです。英語で正確に指示を出すだけでなく、素早い判断も大切です。管制官になるための試験の内容なども教えてもらいました。難しい仕事ですが、カッコよさも感じ

ています。ぼくにとって空港は旅行中に通過する場所でした。でも、これからは空港で働いている人たちに感謝の気持ちを持って、飛行機に乗りたいと思います。

取材で心に残ったことが二つあります。一つは、飛行機の雪や氷を取りのぞく作業で使う液が無色から色付きになったという話です。液がかかったことが一目で分かるようになったそう

です。二つ目は自衛隊の管制官がパイロットに英語で指示を出していたことです。たくさん取材をした中で、仕事で連携することの大切さを感じました。